

恒例の「ふれあい体験学習」で、田植え祭の2日前に

手広中学校の24人がはだしで田植え

田植え祭の2日前の6月12日(木)午後、1キロほど離れた鎌倉市立手広中学校から恒例の「ふれあい体験学習」に参加した生徒24人が広町緑地を訪れ、さくら田んぼ(約0.8アール)で田植えをしました。全員がはだしになり、手足ばかりか、顔まで泥にまみれました。



1週間にわたって断続的に降り続いた雨は昼前に上がりましたが、私たち田んぼの会スタッフは大雨で傷んだ畦や給水路の補修に追われ、準備が十分でなく、0時半すぎに着いた生徒たちに、土のう十数袋を作り、スタッフの大屋進さんの指導で、さくら田んぼの畦を補強してもらいました。

れんげ田んぼ(1.2アール)に設けた苗床から、必要な苗を取り出すのも、高橋潔さんの指導で、生徒たちに自身がやりました。苗は長さ15センチほどですが、根をしっかり張っていて、鍬を使って引きはがすのに、足を踏ん張り、力を振り絞らなくてはなりません。この作業で、早くも田んぼに尻餅をついた生徒がいました。

ペットボトルのキャップを、縄跳び用ぐらいの太さの長いロープに、30センチ間隔で固定した「田植えメジャー」が用意してありました。キャップの位置に苗を植えこみ、列を植え終わったら、畦の両端で「メジャー」を30センチ、後退させて、次の列を植えます。

1時20分から植え始め。24人を3班に分け、10列ぐらいずつ交替で植えました。「メジャー」操作は最初だけ、スタッフの大橋圭介さんと高橋さんがやって見せたあと、志願者を募り、すぐ生徒たちに任せました。

第1陣が植え始めて間もなく、待機していた女子生徒たちが「田んぼに抜き残っている草を抜いていいですか」と申し出て、大歓迎で除草をお願いしました。

待機中、オタマジャクシに歓声

田植えが順調に進んでいる間、待機組から歓声が上がりました。田んぼの水の中にいるオタマジャクシを手ですくい取っています。はしゃぎぶりは2日前、遠足で来てオタマジャクシやザリガニを追いかけた小学校2年生たちと似たようなものでした。

指でつかみ、手のひらに乗せたオタマジャクシの触感は、それをしなければ、味わえない。半世紀前までは、オタマジャクシもカエルもヤンマも、市民生活に近接して生息していたし、30年前まで鎌倉市手広の交差点から水田が見えました。いま、市内に米作農家は1戸だけ。中学生たちが野生の生き物を手で触れる体験の少なさが、歓声の裏側に感じられました。



終わって、恒例のおにぎり

2時すぎ、植え終り。生徒たちはそのあと、すみれ田んぼ(1.8アール)の約半分に残っていた草を抜いてくれました。田んぼの脇を流れる御所川で顔や手足を洗い、入り口広場へ。去年の収穫米で炊いた、おにぎりが待っていました。これも恒例です。

おにぎりはスタッフの小坂泰子さんが、自主保育グループ「でんでんむし」の母親たち14人に協力してもらい、作ったものでした。この日、同じ中学校から自然観察に来た生徒25人にも、おにぎりが振舞われました。